様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：３２６８６
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２５２０２７１

研究課題名（和文）近現代アメリカ文学・文化における恥の表象

研究課題名（英文）Representations of Shame in Modern American Literature and Culture

研究代表者
新田　啓子（Nitta, Keiko）

立教大学・文学部・教授

研究者番号：４０３２３７３７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,100,000円、（間接経費）　930,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、南北戦争期より1940年代までのアメリカ小説を中心に、そこに表れた「恥」の表象を読み解きながら、その社会的意義を探ったものである。文化人類学者であるルース・ベネディクト『菊と刀』（1946）の出版以来、 我々は「恥」をアメリカ文化の属性として思考する積極的な根拠を失ったように見える。しかし、アメリカ文学は恥の表象に満ちている。そうした文学表象がとりわけ「人種問題」の係わる歴史認識をめぐって頻出する事実に着目し、近現代の作家が恥辱の経験に対して取った姿勢を整理しつつ、表象の倫理的・政治的意味を詳らかにするのが、本研究の目的であった。

研究成果の概要（英文）：This study aims at conceptualizing shame as represented in modern American literature written between 1860 and 1950. Particularly in Japanese scholarly circumstances, since the publication of _The Chrysanthemum and Sword_ (1946) by anthropologist Ruth Benedict, we seem to have lost reasonable grounds for positively contemplating shame as a property of American culture. Once carefully investigated, however, American literature is full of representations of shame. This project aims at authenticating a framework of shame as a quintessential American experience. The most crucial element that engenders the powerful affect is the recognition of historically shifted racial relationship in the U.S. By a close investigation of literary, historical and theoretical sources, I have explored a solid and fertile layer of American culture, in which literary authors have attempted to develop representations of shame as resources for an ethical and political mode of self-presentation.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学，英米・英語圏文学

キーワード：アメリカ合衆国　人種　恥辱　情動　南北戦争　奴隷制度　歴史認識　黒人

１．研究開始当初の背景

(1) 私が文学作品に描かれる恥辱（shame, disgrace）について思考するに至ったのは、この十数年間進めてきた黒人文学研究の過程においてのことである。恥とは端的に自我の遺漏感であり、自己のうちの優劣の観念と結びついている。したがって、他者に捕えられ、人間性を剥奪され、隷属を強いられた黒人人間像を描いた作家たちが、自民族の直面した苦難に対して「恥」という名を与えたのは、必然的なことであった。

しかし、そうした表象に関する私の理解は、2006～2009 年度に行った基盤研究（C）「モダニズム芸術における米ソ文化交流の軌跡と黒人知識人の中心性」（課題番号 18520180）の途上で決定的な展開を遂げた。この研究で私は、黒人知識人のソ連への接近、ならびにそれと連動したコスモポリタニズムが、多様な白人批評家の黒人認知を刺激し、独自の知的対話を開いたことを確認した。さらに、そうした知識人のなかでも重要な人物の幾人かは、かつて奴隷制を経済基盤とした南部を拠点としていた。本研究は、そうしたある種、南部らしからぬ人物を輩出した戦後南部の知的・精神的風土への理解を土台に着想された。よって実施初年度より、南部で人種関係において進歩的な思想を残した白人思想家・作家についての検証を、重点的に進めることとなった。

(2) 上記の背景に基づいて、本研究で特に精査した南部白人知識人は V.F. Calverton, H.L. Mencken, W.J. Cash の三者であった。左翼批評家 Calverton は、Alain Locke の *The New Negro* を世に送り出すなど、黒人文学および文化を、アメリカ芸術固有の伝統と見なす新たな認識を主導した。他方、人種偏見とみずからを「貴族」になぞらえる錯覚――南部神話と呼ばれる――に囚われたままに前進できない南部社会を嘲笑した Mencken は、その発展のない不毛の地を「美藝のサハラ」と呼び、戦後南部を「アメリカの恥」と呼びならわす世論の先鋒に立った。しかしその反面で彼は、W.J. Cash という、より直截に南部の恥辱に向き合った人物の登場に寄与することにもなった。

こうした南部白人における恥辱意識のヴァリアントは、本研究の初動における重要な知見をもたらした。つまり、恥とはもはや黒人のみの経験ではなく、白人の、つまり加害者側の恥とともに問題化されねばならないということである。両者の恥の認識が、「剥奪感覚」と「加害意識」という異質な方向から、しかし、人種的自己認識の不安という同一の問題を構造的に形成しているのである。この構造を、さらには暴力にまみれた「人種」の意識を、極めて特異に恥の経験と連結しているアメリカ文化の深層を解明することはできないか――本研究課題の方向性を決する指針となったのは、このような認識であった。

２．研究の目的

本研究の目的は、南北戦争期より 1940 年代までのアメリカ小説を中心に、そこに表れた「恥」の表象を読み解きながら、その社会的な意義をつまびらかにすることであった。恥の表象が、とりわけ「人種問題」の係わる歴史認識をめぐって頻出する事実に着目しつつ、「黒人」、「南部」、「アメリカ文学の倫理的位置づけ」という、主に個別的次元において盛んに掘り下げられてきた主題を、「恥」という概念／表象から再考するのが本研究の大局的な企図である。

Ruth Benedict, *The Chrysanthemum and the Sword* (1946)以来、我々は、「恥」をアメリカ文化の属性として思考する積極的な根拠を失ったように見える。周知のように Benedict は、「恥を基調とする文化」と「罪を基調とする文化」を峻別した。彼女によれば、前者は日本等、非西洋社会に一般的な類型であり、後者は西洋社会に一般的な類型である。さらに彼女は、「善」をなすふるまいが、前者の文化においては他律的であり、後者においては自律的であると、また自律的道徳規範を持つ後者の方が前者に優っているということを暗示した。そして、中でもアメリカが、彼女のいう「罪」の文化の代表格であるというイメージが、日本敗戦直後における同書の出版により定着した。

しかし実際に精査すると、アメリカ文学は恥の表象に満ちている。とりわけ人種的抑圧や暴力をアメリカ文化の中核に見るならば、それは立派に「恥」を喚起してきた文化であるともいうことができる。自我の遺漏体験・優劣の価値判断を帯びた心的負担としての恥は、人を必ずや倫理的岐路に立たせるものである。個人にとり、おのれの「恥」に向き合うことは概して苦痛であり、時に暴力を伴った否認や合理化が行われる。

苛烈とも呼べるこの情動経験が、虚構を介した真理追究行為である文学を求めて表出するという事態、さらにはそれが、近現代アメリカ文学において一つの確かな傾向と呼べるほど、多様なコンテクストで言説化されているという事態から、アメリカ文学の深層を捉え返すことは可能であるか。本研究は究極的に、この問いの解明を目指したといってよい。いわば本研究は、そうした文学史上の潜在的事実を踏まえることにより、当該時期のアメリカ文学作品に内在する倫理的可能性を考究することを最終的な課題としたのである。

つまり本研究は、「恥」をアメリカにおける人種意識の符牒と捉え、その展開の内実を明らかにしようとしたものである。しかしあくまで、その試みを抽象的な思弁で終えることなく、文学作品の思想史的な位置づけや、テクスト発生の社会的根拠とともに、可能な限り正確に実証することを志した。その達成のために、以下 5 項目にわたる作業を設定し、4 カ年をかけて取り組んだ。

(1) 黒人文学に表れる恥辱表象の傾向的把握と個別例の整理。
(2) 南部白人文学者および知識人が抱える「恥」の様相に関する調査。
(3) 北部白人文学者・知識人の南部復興における言説の検証と、彼らにおける南部観の解明。
(4) 上記(1)〜(3)の相関関係の解明。
(5) (4)に基づいた恥の文学表象が有する思想的意義の考察。

３．研究の方法

方法論の点からいえば、本研究は、テクストの発生と時代的・地域的に関連の深い史料分析に立脚した文献研究ということができる。具体的な課題は前段に概説したとおりであるが、特に「人種」という争点をめぐって生成した恥の表象構造を紐解くにあたり、その対象を①黒人、②南部白人、③北部白人に分類してそれぞれ調査し、最終的にはその呼応関係を検証した。

研究の初動において、私は黒人と南部白人の恥辱言説の構造的連関に、特に深い意義を見出していた。そのため、少なくとも研究 2 年目までの段階では、「北部白人」というアクターの重要性に対する意識は希薄であった。しかし、研究が進むにつれ、そのグループの主流を占めた奴隷解放論者（abolitionists）、さらには戦後南部で利益を得た再建当局の役人たちの「潔白意識」というものが、より重要なテーマであるという認識に至った。

すなわち、人種差別や植民地的関係における加害意識が抽出できないということ自体、言い換えれば「勝者」として恥の意識に連座する必要のなかった北部人の立場自体が、恥辱の文学思想の見取り図において重大な意味をなしているのだ。事実この潔白意識に関しては、北部作家にも自己批判的に指摘する者が多いことがわかり、研究の一層の深化を導いた。本研究の検証作業は、このような経緯で、上述①〜③の主体について進められることとなった。彼らの自意識の記録や言説、互いに注がれる批判的なまなざしや印象、ひいてはそこに暗示される力学を浮き彫りにする多元的テクストが俎上にのぼった。

具体的に取り組んだ作業の段階は、1) 作品と歴史的一次資料のシステマティックな解題から、2) 哲学・精神分析学の二次資料を用いた恥辱表象の意義の考察・概念化へと進められた。主に検討した作家は以下である。

(1) 黒人作家・思想家
Olaudah Equiano, Frederick Douglass, Harriet Jacobs, W.E.B. DuBois, Harriet Wilson, Pauline Hopkins, William Weldon Johnson, Charles Chesnutt, Nella Larsen, Jean Toomer, Wallace Thurman, Langston Hughes, Richard Wright, James Baldwin.

(2) 南部作家・思想家
Mark Twain, William Faulkner, V.F. Calverton, H.L. Mencken, W.J. Cash, John Crowe Ransom.

(3) 北部作家・思想家・政治家
Harriet Beecher Stowe, Henry James, Stephen Crane, Albion Tourgée, Rufus Saxton, William Graham Sumner, Aaron Columbus Burr, Gertrude Stein.

４．研究成果

(1)「研究目的」の達成状況

当初予定していた 3 つの基礎調査についてとりわけ重要な事実関係を以下に特記する。詳細については、主として図書業績③『アメリカ文学のカルトグラフィ――批評による認知地図の試み』（研究社、2012 年）において公開されている。

① 黒人文学における恥辱表象は、その生成期のジャンルから、様々に展開を遂げてきた。古くは Equiano, Douglass, Jacobs 等の奴隷体験記が、隷属する自我と恥の格闘を記録し、そのモティーフは奴隷解放後においても消えることはなかった。

例えば、すでに 1850 年代には定式化していた「色の白い黒人の悲哀」という主題は、肌の色ではなく、他者の視線が作る「黒」に対する人知れぬ恥に光をあてた。このテーマはハーレム・ルネサンス期になると、パッシング小説の形式を取る。白人になりすました主人公の心象がメランコリックな機微を見せる時、今度は「黒人性」を隠蔽することの恥が、混血児のアイデンティティ不安を別方向から描写した。

このような心的経験を綴った作家は多彩であったが、なかでも Hughes は、1930 年以降政治色を強め、大恐慌を背景に南部で多発するリンチへの批判を作品に込めた。彼は特に、黒人登場人物の恥辱を前景化し、暴力の痛ましさを強調したのである。このように、多くの黒人作家たちが、その歴史的過去と可視的身体を生きる実存の表現として、恥の表象を成熟させた。

② 他方、南部を拠点とした白人知識人においての恥は、その地域の過去への評価ならびに歴史認識と本質的に係わっている。

決して「南部人」というわけではなく、ある意味「第三者」として、南部から心的距離を保つことが容易であったと思われる Mencken や Calverton の論調の端々には、南部社会とその心性への羞恥が感じられる。彼らの人種問題への積極的な介入は、大筋においてその認識に導かれていた。だがノースカロライナ州シェルビーで育ち、十分に南部的心性をもっていた Cash はさらに進み、南部の恥や罪責

そのものの歴史的解明を試みた。その立場は、William Faulkner との類推で理解されうる位相を有する。

彼の *The Mind of the South* (1941)は、残忍かつ好戦的な行動原理で奴隷制を正当化してきた南部の悪弊を暴きながら、南部人として、みずから深くその加害者性を恥じていた。いわば彼は、自身も外在化できない南部神話の崩壊が課した苦悩に苛まれていたのである。ゆえに彼は、嘲笑を込めて、高みから辛辣に南部を皮肉る Mencken とは違い、自己の「低さ」を掘り下げるような思考のスタイルを築き上げた。

③ 北部白人作家にあって最も深く、ほぼそのキャリア全般にわたって恥辱のテーマと向き合ったのは Mark Twain である。例えば *Adventures of Huckleberry Finn* (1885)において描かれる多層的な恥、そしてハックの恥の自意識は、南部共同体においてはおろか、おそらくアメリカ全土で困難を極めた人種間の絆をもたらす契機としての、その情動の倫理的可能性を表象しているといってよい。Twain はつまり、ある少年によるおのれの恥との向き合いだけがわずかに出口を照らしうるような、人種問題解決の隘路を描いていたということである。

また晩年に至り、折しも帝国主義の様相を強める政治的世界と、そこに連座しようとするアメリカ合衆国の未来に対する正当性を見出し難くなった彼は、旅行記 *Following the Equator* (1897) において "Man is the only animal that blushes. Or needs to"という言葉を残している。つまり彼は、「恥を知る（＝赤面する）ことこそが人間の条件である」というその謂いを、アジア・アフリカ・太平洋地域をほしいままに支配する列強に向けた。アメリカでは南北戦争後、奴隷制の廃止と国家の「再建」が進行したが、もとより南部人である彼が、北部再建政策の欺瞞性を看過できるはずはなかった。彼が晩年指摘した問題は、より救いがたい世界史的規模で権力関係を構造化し、「南側」の蹂躙体制を強めた「恥ずべき欺瞞」の根深さを告発する文明批判に発展した。

一方、それと同じ年代の北部において、同じく主人公の恥の意識が、物語の倫理構造をなす重要な作品が上梓されている。Stephen Crane の *The Red Badge of Courage* (1895)である。

南北戦争を知らない戦後生まれの Crane は、よく言挙げされるように、おのれの人間観だけを頼りに兵卒の体験を想像した。果たして彼が創作した個人的体験とは、究極には、戦争をめぐる歴史認識の問題に逢着していた。それは作家が、南北戦争をほぼ個人の「恥辱」の経験、つまり、戦場でおのれの「恥」と向き合い、それによって自我をつくった主人公の物語として描いたということにほかならない。

しかもニューヨークを拠点とする Crane が描いたのは、南軍ではなく北軍兵士の卑怯さと、それに対する羞恥に発する複雑な自意識であった。このことは、北部白人が固有に安住することのできた「潔白意識」を弾劾し、彼らが建設した戦後社会の内実について反省を促す作家の意図を暗示する。Twain が見据えたものが、植民地主義的膨張を伴った経済主義の横暴であったとすれば、Crane のそれは、北部に「アンクルトムの小屋」を蔓延させ、貧困労働者層と資本家層の格差を作り上げた北部産業化社会であった。

(2) 恥言説と金ぴか時代・膨張主義批判

上記①～③の相関関係の解明と、それに基づく恥の文学表象のアメリカ思想史的意義〔「研究の目的」に述べた作業課題(4)と(5)〕については、現在、著書ならびに論文による成果公開の準備を進めているが、その基本構造は以下である。

ここで例示した Twain と Crane による恥の主体は、「南部」という敗者でも、蔑視される「黒人」でもなく、アメリカの近代化を進め、やがて同国を世界一の大国へ成長させた北部アメリカニズムでこそあった。彼らにおける恥の言説はつまり、拝金主義が横行し、経済的利潤が倫理に優って信奉された、所謂「金ぴか時代」への批判に相違なかった。奴隷制を背景とする作品に描かれた「恥」と、経済階層間の格差と社会的残虐性に対する「恥」の意識を喚起しようとする文学的意図は、よって、この争点をもって縫合されているのである。

「恥」のレトリックを用いた奴隷制批判を、北部の潔白意識に基づくアメリカニズム批判へと飛翔させた作家たちの意味世界は、たとえば、黒人解放民（元奴隷）を「有効利用」した中米植民計画など、現実世界の文脈と呼応関係にあることが Freedmen's Bureau に係わった北部知識人等の言説によっても明らかとなっている。このことは、奴隷制や南北戦争を主題とした恥の物語が、国内外における帝国主義批判へ進展したことの必然性を論証する希有な手掛かりと考えられる。

本研究期間の全般を通して分析してきた政治的・社会的史料は、「奴隷制の処理」と「拡張主義的心性」が、「恥辱」の文学表象との間にもつ因果関係を示している。本研究は、2013 年度をもってひとまず終了されてはいるが、この点への研究はさらに継続されており、2015 年度にかけて、文学作品のモティーフやテーマ、物語や修辞との照合による成果公開が予定されている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 16 件）

① 新田啓子「『生の芸術家』を目指した男――李小龍の思想断章」『現代思想』第 41 巻第 13 号（pp. 34-47）、青土社、2013 年 9 月。査読無（招請）

② 新田啓子「9.11 以後のアメリカ――友と敵の分轄をめぐって」『論叢クィア』第 5 巻（pp. 49-61）、クィア学会、2012 年 11 月。査読無（招請）

③ 新田啓子「土地への愛、あるいは哀惜を考えるために」『現代思想』第 39 巻第 9 号（pp. 162-65）青土社、2011 年 6 月。査読無（招請）

④ 新田啓子「アメリカのプロファイル――文学研究へのアプローチ第 22 回 money (2)」『Web 英語青年』第 156 巻第 12 号［電子書籍 URL: http://www.kenkyusha.co.jp/modules/03_webeigo/］（pp. 16-29）、研究社、2011 年 3 月。査読無（招請・連載）

⑤ 新田啓子「アメリカのプロファイル――文学研究へのアプローチ第 21 回 money (1)」『Web 英語青年』第 156 巻第 11 号［電子書籍 URL: http://www.kenkyusha.co.jp/modules/03_webeigo/］（pp. 27-35）、研究社、2011 年 2 月。査読無（招請・連載）

⑥ 新田啓子「アメリカのプロファイル――文学研究へのアプローチ第 20 回 animal (2)」『Web 英語青年』第 156 巻第 10 号［電子書籍 URL: http://www.kenkyusha.co.jp/modules/03_webeigo/］（pp. 22-33）、研究社、2011 年 1 月。査読無（招請・連載）

⑦ 新田啓子「アメリカのプロファイル――文学研究へのアプローチ第9回 animal (1)」『Web 英語青年』第 156 巻第 10 号［電子書籍 URL: http://www.kenkyusha.co.jp/modules/03_webeigo/］（pp. 10-19）、研究社、2010 年 12 月。査読無（招請・連載）

⑧ 新田啓子「混血の情動――自我と宿命の狭間にて」『フォークナー』第 12 号（pp. 40-56）日本ウィリアムフォークナー協会、2010 年 4 月。査読無（招請）

〔学会発表〕（計 9 件）

① Nitta, Keiko. “Black Bottom of Modernity: Racial Imagination of Japanese Modernism.” Asian and Middle Eastern Studies Program, College of William and Mary (Virginia, USA). November 5, 2013.

② 新田啓子「Modern Domestic *de race*――家内労働と生の境界」「合衆国における労働の文化表象」研究会、成蹊大学アジア太平洋研究センター、2013 年 6 月 25 日。

③ 新田啓子「戦争における名誉と恥――Stephen Crane が明かす暴力の位相」人文科学研究所公開研究会、中央大学、2013 年 3 月 6 日。

④ 新田啓子「『国』と『民』と『失われた環』――地理的想像力とアメリカ文学」日本アメリカ文学会東京支部 1 月例会、慶應義塾大学、2013 年 1 月 26 日。

⑤ 新田啓子「私秘性の “composition”――Gertrude Stein の散文詩」日本アメリカ文学会東京支部 6 月例会シンポジウム「モダニズムの詩学を問い直す――詩と散文の交錯」慶応義塾大学、2010 年 6 月 26 日。

⑥ 新田啓子「未開という名の尖端――日本モダニズムと原始主義」日本英文学会第 82 回全国大会シンポジアム第 7 部門「Noisy Blackness――近代文学のイマジネーションとアフリカ的基底」神戸大学、2010 年 5 月 30 日。

〔図書〕（計 5 件）

① 新田啓子編著、後藤和彦、林みどり、小野沢あかね、渡辺憲司、舌津智之、黒岩裕市、梅澤弓子、田中治彦共著『ジェンダー研究の現在――性という多面体』立教大学出版会、2013 年 4 月。213 総頁。

② DeVine, Christine, ed. Keiko Nitta, Matthew Kaiser, Caroline Kisiel, John McBratney, Kendall McClellan, Lindsay Fincher, Elizabeth Deis, Lowell Frye, Nathalie Vanfasse, Hackler, Deborah Logan, Susan Casteras, Kalata Vaccaro. *Nineteenth-Century British Travelers in the New World*. London: Ashgate, January 2013. 267-84.

③ 新田啓子『アメリカ文学のカルトグラフィ――批評による認知地図の試み』研究社、2012 年 4 月。328 総頁。

〔その他〕
ホームページ等
「アメリカのプロファイル―文学研究へのアプローチ」(2009 年 4 月～2011 年 3 月) 研究社電子雑誌『Web 英語青年』連載 URL: http://www.kenkyusha.co.jp/uploads/03_webeigo/sei-bk.html

６．研究組織
(1)研究代表者
新田 啓子(Keiko NITTA)
立教大学・文学部・教授
研究者番号:40323737